

# 四十而不惑（或）、40年をふりかえる

当センターの前身である、南山短期大学人間関係研究センターが設立されたのは1977年のことで、今年度は創設から41年目となります。創設時からセンター研究員であった諸先輩は退職され、南山短期大学時代の人間関係研究センターを知るセンター研究員も少なくなってきました。そこで、今回の特集は「人間関係研究センター40年をふりかえる」として、当センターのこれまでの歩みをふりかえる企画となっています。

どんな組織でも、その文脈、歴史、文化を有しています。当センターも例外ではなく、創設時からの諸先輩による実践の積み重ねによって蓄積された歴史、文化、価値観があります。今回の特集では、南山短期大学または南山大学人間関係研究センターで活躍され、退職された諸先輩である、星野欣生氏、中堀仁四郎氏、グラバア俊子氏、津村俊充氏、石田裕久氏からの貴重なメッセージをいただくことができました。読者の皆さまも、諸先輩のメッセージから、当センターの40年の歴史に触れていただければと願っています。

さらに、2本の特集も掲載されています。当センターの諸活動の中の1つが公開講座の開催です。これまでの40年間で、のべ7900人を超える方々にご参加いただきました。坂中正義氏による寄稿「人間関係研究センター「公開講座」のあゆみ」からは、当センターの公開講座の系譜や変化をご理解いただけます。また、当センターは1984年から毎年研究紀要を公刊してきましたが、池田満氏による寄稿「センター紀要の歴史と変遷―“ふりかえり”の一つの試み」では、南山短期大学時代の旧センターの紀要「人間関係」と、現在の当センターの紀要「人間関係研究」の特徴について分析されています。この2本の特集から、当センターの40年の歴史をメタな視点からふりかえていただけると幸いです。

グループや組織は、その歴史から培われた文化を大事にするとともに、メンバーや環境の変化から変わっていくことも必要とされます。Tグループとラボラトリー方式の体験学習の実践知や価値観、倫理観を諸先輩から引き継いだ身として、根幹となるものを今後も大切に守りながら、新たな展開と革新に取り組む必要があると最近感じています。その一つの形として、センター研究員で、ラボラトリー方式の体験学習について整理し言語化するプロジェクトにも現在取り組んでいます。

さて本号では、特集以外では、Article 4本、実践報告1本、資料1本、公開講演会の逐語資料3本の計9本が掲載され、非常に豊かな内容となりました。Articleの4本のうち、2本はセンター研究員によるもの、他の2本は南山大学人間文化研究科教育ファシリテーション専攻修了生による投稿です。当センターは「広く学際的視点にたった人間関係研究」を推進していますが、この紀要にも幅広い視点からの人間関係に関する諸研究を掲載することができました。ご一読いただけると幸いです。

南山大学人間関係研究センター長 中村和彦